

Rim  
林

Jong  
鍾

Seok  
碩

学位の種類 博士(文学)

学位記番号 文博第9号

学位授与年月日 平成4年3月27日

学位授与の要件 学位規則第5条第1項該当

研究科専門課程 東北大学大学院文学研究科  
(博士課程)国文学国語学日本思想史学専攻

学位論文題目 川端康成の研究

論文審査委員 (主査)  
教授 菊田茂男 教授 鈴木則郎  
教授 佐々木昭夫

## 論文内容の要旨

### 目次

凡例

序論 川端康成研究の課題	3
一、川端研究の対象と方法	3
二、川端研究の現段階	3
第一篇 川端康成における文学的自覚と形成	5
第一章 川端の文学的出発	5
第二章 川端の読書体験	6
第三章 川端の人生体験	7
第四章 川端と『新思潮』	8
第五章 川端と新感覚派	8
第二篇 川端康成の小説の世界	9
第一章 『十六歳の日記』論	9
第二章 『伊豆の踊子』論	10

第三章 『雪国』論	12
第四章 『山の音』論	13
第五章 『古都』論	15
結 論 川端康成の文学的世界	17
一、日本近代文学における川端の位相	17
二、川端的なるものの文学的諸相と特質及び川端研究の今後の課題	18
(参 考)	
林鍾碩主要研究業績目録（平成四年三月現在）	19

## 序論 川端康成研究の課題

### 一、川端研究の対象と方法

「川端康成の文学は伝統の根ざしに生い育った近代の名花である。」と吉田精一は述べているが、このことは、川端のノーベル文学賞受賞によって十分に立証されることとなった。そして更に吉田は、川端の文学を「神宝」であるとも言い、「その神宝をとくことは、日本文学研究の一大目標である。」とも指摘している。本研究の目的もまた、そこにあるといっても差し支えないであろう。

さて、本研究は、川端の創作活動のうち、主として小説を対象として行うものであり、方法の上では、文芸学的立場に拠るものである。従って、「第二篇 川端康成の小説の世界」に示したごとく、作品の世界それ自体を徹底的に分析し、文芸学的解釈を試みる作品論を主眼とするものであることは言うものでもない。

しかしながら川端の場合は、その文学的出発・人生体験・『新思潮』及び新感覚派との関係を中心とする文芸的、精神的基底をも無視するわけにはいかない。作品世界との間に、微妙な脈絡を有するからである。「第一篇 川端康成における文学的自覚と形成」において、そうした側面についての考察を行ったのもそのために外ならない。

### 二、川端研究の現段階

川端の作品が多くの人々の注目を集め、本格的な批評の対象として採り上げられるようになったのは、大正十年四月の『招魂祭一景』においてであった。以後、大正十二年一月と大正十三年十月にそれぞれ創刊された、『文芸春秋』と『文芸時代』に、積極的に短篇小説を発表するに至る。これらの作品に対しては否定的評価もなかったが、全体としては肯定的評価をもって好意的に文壇に迎えられた。

大正十五年一月・二月に発表された『伊豆の踊子』は、川端の出世作として好評を得たが、この作品についてのまとまった評論や研究は、それほど多いとは言えない。川端文芸に関する研究が活

発に行われるようになったのは、彼の代表作とも言われる『雪国』が昭和十二年六月に刊行されてからのことである。小林秀雄・佐藤春夫・河上徹太郎らは揃ってこの作品に賞賛の言葉をおくった。

戦後になって、川端は故国日本の山河に強い愛着を示し、そのことが彼の作品世界を主導することになる。林武志はこれを川端の「日本（古典）回帰」と規定する。こうして川端は、文壇においても大家として注視を集め、戦後に完結をみた『雪国』をはじめとする『山の音』『千羽鶴』『古都』などの名作を次々と発表して名声を得るに至る。それらの作品は、数多くの外国語に翻訳されて、特に欧米諸国の読者から深い共感が寄せられるようになり、世界文学としての評価もおおのずから定まりつつあった。

そうした背景のもとに、中村光夫の「川端康成論」のような、川端評価の集大成ともいえる作家論が数多く発表されたが、川端研究が本格的に活況を呈するに至ったのは、昭和四十三年十月、川端へのノーベル賞（文学部門）の受賞が決定してからである。このころからの川端研究は、キリスト教との関係、心霊学の影響、魔界思想、万物一如の観念、輪廻転生思想などをめぐって幅広く行われるようになり、一方、伝記研究の面においても著しい成果が世に問われることになった。

昭和四十五年には、川端文芸の総合的考察を目的とする川端文芸研究会が発足し、その成果の一端として『川端康成研究叢書』全十巻などの研究書が相次いで刊行された。そして新潮社は、川端没後十年の準備期間を経て、緻密な本文校訂を伴った『川端康成全集』全三十七巻（全集三十五巻、補巻二巻）を、昭和五十七年六月から五十九年五月にわたって刊行した。ここにはじめて信頼すべき川端文芸の全貌とその作品本文が明かとなり、この全集にもとづいての本格的な研究への道が開かれることになったのである。

## 第一篇 川端康成における文学的自覚と形成

### 第一章 川端の文学的出発

川端は、自身の処女作として『招魂祭一景』『油』（又は『ちよ』）とともに、『十六歳の日記』をあげている。しかしながら、『十六歳の日記』は、「原日記」に二十七歳の時に書き加えた部分が多く含まれているので、処女作と呼ぶには問題がないわけではない。にもかかわらず、川端がこの作品をもって処女作と自認するのは、それが彼の作品史の中で重要な意義を持ち、かつまた、最後の血肉のつながりである祖父の生前の最期の日々の姿を下敷きとしているからに外ならない。

祖父は、生活人としては無能に近く、非現実的な夢を追い続けたが、川端の人生観照もそれを受け継ぐものであった。そして彼はそうした資質を文芸の想像的世界のなかに昇華させた。とにかく川端は、『十六歳の日記』の「原日記」執筆時の、盲目の祖父との二人だけの息詰まるような日常生活から逃れるために読書に耽溺するが、このことがかえって小説家としての彼の原体験・原風景を形成することになり、文芸的自覚を促す誘引ともなったのである。従って、この時期、つまり『十

六歳の日記』の「原日記」の成立期が、とりもなおさず、川端の文芸的自覚とその出発の時点であったことは疑うべくもない。この時すでに彼の中には、非現実への空想・孤児根性・徒勞の精神などの人生感情・世界感情が芽生え始めており、また、対象を客観化する散文精神と、それとほとんど等価の主観的抒情精神が共存していたのである。

## 第二章 川端の読書体験

初め画家になるつもりでいた川端の志望が変わり、小説家を志すようになったのは、書物の濫読によるものであった。川端の読書体験や読書範囲は、彼の祖父や父からの影響の跡を濃くとどめるものであったことは否定できない。

川端は、自分の通っていた小学校の「小さな図書館にあった本は、文字通り一冊残さず無茶苦茶に読んだ。」というが、それは、立川文庫や押川春浪の冒険ものの類であったらしい。そして中学校に入ってからは、しだいに文学書を読み親しむようになり、『新潮』や『新小説』などの文芸雑誌にも読書範囲が及んだということである。『藤村詩集』に心を傾け、中学の上級ごろには、白樺派の文芸にも傾倒していたという。日本の古典についても近松・西鶴をはじめとして『源氏物語』などの王朝文芸にも関心を寄せ、ロシア文学をはじめとする外国（西洋）文学にも心酔していたという。こうした多岐・多彩にわたる膨大な読書熱は、旧制高等学校（一高）時代まで続き、生涯に及ぶものであった。特に、一高時代に愛読した聖書の精神は、川端の文芸の基底に影を落とすものでもあった。

このような多量で幅広い読書体験は、やがて人生観・世界観の形成の契機となり、文芸的モチーフとして川端文芸の基層に浸透していったことは疑うべくもない。

## 第三章 川端の人生体験

川端文芸を理解する上で、「孤児」というキーワードを無視することは許されない。満二歳の時に父が死去し、三歳にして母とも死別している。やがて祖父母に引き取られて育ったのであるが、七歳の時にはその祖母にも死別、十五歳に及んでただ一人の血肉の祖父とも永訣することになる。彼は、名実ともに「孤児」として親戚の家を転々としながら生きて行くことを強いられる境遇を余儀なくされたのである。彼の人と作品に「孤児」としての酷薄な運命の皺が刻み込まれているのはそのためにも外ならない。しかしながら川端は、屈曲し歪みやすい「孤児」としての状況にうちひしがれることなく、素直で強靱な、挫折を知らない精神をもって苦境を乗り越えていったのである。

それにもかかわらず、「孤児」としての川端の日常生活は、悲哀と憂鬱にみちたものであった。そのような中学五年の少年川端の前に現れたのは、下級生の少年との同性愛であった。当時の川端の日記には「お前の指を、手を、腕を、胸を、頬を、脛を、舌を、歯を、脚を愛着した。」とある。「なごやかな家庭に閉ちこもってゐる「ほのぼのとした女」のような少年に同性愛を感じ、感覚的愉悦を夢想したりもする。しかしそれは、あくまでも純粋な夢想の枠内にとどまるものであった。

一高時代の彼は、その少年にあてて、「お前を僕の救済の神を感じる。」と書簡に記し、また、「温められ、清められ」「浄化」され、「純一」化されることで「救はれ」たと、同性愛について回想している。

川端は、二十二歳の大学生のころ、カフェ・エランで知り合った十六歳の娘と恋愛し、婚約へと進んだが、わずか一月で破談となった。この恋愛事件は、川端にとって重大な意味を持つこととなり、後年まで長く「尾を曳いて」、『南方の火』『日向』以下、数多くの作品に色濃く影を落とすことになる。「孤児」「同性愛」とともに、この「恋愛」が川端文芸の重要なモチーフやテーマとして作品世界を貫流している事実は否定するべくもない。

#### 第四章 川端と『新思潮』

川端は、数多くの同人雑誌に参加したが、中でもとりわけ情熱を傾注したのは『新思潮』と『文芸時代』である。かれは第六次『新思潮』創刊号に『ある婚約』を、次いで第二号に『招魂祭一景』を発表した。『ある婚約』は文壇の注目するところとはならなかったが、『招魂祭一景』は、好評をもって迎えられた。こうして川端は、『新思潮』によって創作活動の足掛りを得たのである。それだけではない。『新思潮』はまた、孤児として育ってきた川端に初めて「信頼と友情と」を共に分かちあえる友人たちとの出会いの場を提供してくれるものでもあった。同人たちは金銭的（経済的）にも精神的にも生活の場を共有し合っていたのである。さらに菊池寛の知遇を得、『文芸春秋』の編輯同人に加えられて文壇への道をひらくことになったのも、『新思潮』同人の尽力によるものであった。『新思潮』は、川端に文学と人生における良き師友との出会いの場であり、創作活動への始動期でもあった。

#### 第五章 川端と新感覚派

川端は、『文芸時代』創刊の辞で、「宗教時代より文芸時代へ」と述べている。彼がこの新たな文芸運動の機関誌に寄せる抱負のほどをうかがい知ることができる。

ところで『文芸時代』は、新感覚派の文芸運動の母体として著名であるが、この名称は、『文芸時代』創刊号に載った横光利一の小説『頭ならびに腹』の冒頭の一節、「真昼である。特別急行列車は満員のまま全速力で馳けてゐた。沿線の小駅は石のやうに黙殺された。」というような表現にふれて、千葉亀雄が命名したことに由来する。川端はこうした新感覚派の文芸理論の構築につとめ、みずからの主張を万物一如の思想として提示し、その進展を図った。万物一如の理論が、後に川端文芸の主要な方法やモチーフとなったことは言うまでもない。

川端の作品には、いわゆる新感覚派的表現は必ずしも顕著であるとはいえないにしても、『十六歳の日記』の「原日記」をはじめとして、『男と女と荷車』『バッタと鈴虫』などにはすでに新感覚派的表現の頻出が認められる。川端は、『文芸時代』同人に先駆けて、優れて新感覚派的であったし、また後年までそうした方法論に依拠した作家として、つまり、新感覚派の先駆者であり、最後

を飾った小説家として、日本近代文芸史上に一時期を画した功績を逸するわけにはいかない。

## 第二篇 川端康成の小説の世界

### 第一章 『十六歳の日記』論

川端の『十六歳の日記』は、「原稿紙百枚用意して」「日記が百枚になる前に祖父が死」なければ「祖父は助かる」だろうという祈願をこめ、一方では、「祖父が死にそうに思へるからこそ、せめてその面影をこんな風な日記にでも写して置きたいと思って」書き初めた写生風の短編である。『十六歳の日記』の執筆にとりかかる前日の、大正三年五月三日付けの日記には、「今日自分は切に小説の傑作が祖父のモデルで出来るをうたがははない。一つ書いて中央公論に出してみやうかと思ふ」とあるところから推察すると、虚構を加えた小説のつもりで書いたものであることが明らかである。事実、作品の中には、虚構として識別できる箇所も指摘できる。食欲旺盛な祖父が、四十四日間便秘のため「通じ」がなかった、などの叙述がその一例である。また、「田中みと」なる女性を、「おみよ」と呼んで、登場させ、大きな役割を振り当てている点も虚構として注目される。『十六歳の日記』における「おみよ」の役割は、前後に執筆された日記のそれに比べて、はるかに大きく、劇的な側面を担うものとして造型されている点も無視しがたい。

右のような虚構性の存在の問題は、この作品の解釈に新たな示唆を与えるものである。従来、この作品を「写生風の日記」として実録の立場から、川端の伝記研究の資料として重視される傾向が強かったが、事実としての資料性、資料としての事実性が希薄である以上、文芸作品としての考察が改めて要請されることになるからである。「おみよ」の存在は、そのような観点から祖父の死を凝視し問いかける契機になっていることを見過ごしてはなるまい。

### 第二章 『伊豆の踊子』論

「私」が雨宿りをしていた峠の茶屋の爺さん夫婦の存在は、『伊豆の踊子』の解釈の上で、重要な意味を持っている。この老夫婦の人物像の造型には、川端の祖父母のイメージが投影されているからである。

ところで、この茶屋の婆さんは、「私」から五十銭銀貨をもらったことに感謝して、「私」の鞆を持って峠のトンネルの前までついて来て別れるが、このトンネルの向こう側は『雪国』の「国境の長いトンネル」の向こう側がそうであるように、非現実の世界として設定されている。

さて、「私」と踊り子は、お互いに淡い恋情を抱くのであるが、それはあまりにも不確かで自覚を伴わないものであり、愛という次元で捉えることのできるものではなかった。しかし何となく読者の胸底に美的感動を誘うものであった。手さえも触れることのないこの淡い愛情は、『雪国』の基調音ともいふべき「徒労」の美的感情を連想させる。「徒労」であるが故に美しいという『雪国』

の島村の美意識が、すでに『伊豆の踊子』の向こう側の非現実の世界に淵源していたと言えるだろう。

ここに登場する旅芸人の一行は、社会の最下層の集団として幾多の差別と侮蔑を受けながら疎外されて生きている人達である。彼らの生活態度は、一見、無秩序で貞操観念も薄く乱れているかのようであるが、実は彼らなりの家族内の序列や秩序が存在し、人間としての躰やけじめを中心とする家庭教育があり、家族や同族同士のあたたかい情愛やいたわりの精神に裏打ちされていることを「私」は感得している。だから踊り子の放った「いい人」という一言に、「私」の精神の病患は癒され、慰撫されることにもなる。『伊豆の踊子』の主題は、まさにそうした点に求めることができるだろう。さて、前述したとおり、峠のトンネルの向こう側が非現実の世界であるという点において、『伊豆の踊子』は『雪国』に通底し、更に『山の音』の「信州」にも通じる。「信州」もまた、向こう側の非現実の非日常的世界として描かれているからである。このように考えると、『伊豆の踊子』は、単に「伊豆もの」の系列の始発点を成すにとどまらず、「旅先もの（旅もの）」の出発を告知するものであり、「旅」のもつ多様なモチーフやイメージ、ひいては川端文芸の原風景をも示すものに外ならなかったのである。

### 第三章 『雪国』論

駒子にはモデルが存在するとか、越後の湯沢温泉が舞台であるとかがよく指摘されている。しかしながら、作品としての『雪国』を読むに当たって、これらの夾雑的知識を念頭に置く必要はない。三枝康高のいうごとく、「川端康成の一種の異様な生理の動き」が作り出した、現実とは切り離された一つの完全に独立した世界であるからである。そしてこの世界は、非現実的、非日常的世界であることは言うまでもなく、ここに登場し、こうした世界を観察する視点人物としては、「天国の詩」を観たり、「鉄瓶で、やはらかい松風の音」を聴いたりすることのできる異様な感覚の持ち主である島村のような人物こそ最もふさわしいのである。

ところで、『雪国』は、島村・駒子・葉子の三人が切り結ぶ三角関係（三者関係・三項関係）を描いた小説である。あるいは、葉子は駒子の分身として設定された人物であるといった方が、より適切であるかも知れない。つまり、駒子と葉子を併せて一人の女性像とみなすことも可能なのである。いずれにしても、三者（三項・三角）の関係性を追求する基本的構図であることに変わりはない。基本的に『雪国』は駒子と島村の恋物語ということになるだろうが、島村は生活的人格を欠落した（付与されない）虚像として、自分に向かって迫ってくる駒子の愛のすがたを映す鏡として機能しているに過ぎないのであって、その意味では、駒子一人の恋物語ということも許されよう。この島村に向かう駒子の愛は、肉体的側面を排除することはできないにしても、より精神的な契機を強く含むものであることは疑い得ない。そのことは、本体としての駒子の官能美と、その分身としての葉子の清潔な精神美との葛藤という複雑な構造を示して、徐々に深化・進展の様相をあらわにするプロットと無縁ではない。島村の視点からすれば、こうした愛は「徒勞」ということになるが、

しかし「徒勞」であるからこそ、返しを期待しない無償の純粋な愛の美意識ということにもなるのである。

けれども、愛という営為は、一方からの働きかけだけでは成り立ち得ないものである。結局、駒子と島村は別れるより仕方がない。島村が駒子にひかれ、彼女に会うのは、官能の世界で刻印された感覚的印象の悦楽の故である。精神的なものの共有を求める駒子の生き方と擦れ違うものであることは言うまでもない。この二人の別離が、必然的な結末であることは明らかである。作品の中では、そうした別離の場面が直接的、具体的に描かれることなく、観念の世界の中で二人を一つに収斂するものとしての天の河へと昇華されている。象徴的な美的表現として物語の進行が終結する。

このようにみてくるとき、『雪国』の世界は、本体としての駒子と分身としての葉子を相互に機能させることによって、肉体的、官能的愛よりはむしろ精神的純愛の精神と行為を、すなわち「徒勞」の愛のはかない無償の純粋さを、「徒勞」の人である島村の鏡の中に映し出して行く日本の伝統的美意識を浮き彫りにするものであったと言えよう。それが、非現実的、非日常的仮象の世界、虚像としての向こう側の時空間の中に哀しく、はかなく凍結せざるを得なかったところに、川端の人生観照・世界観照の深さ・確かさと哀切な美意識を読みとることができることは、改めて強調するまでもあるまい。

#### 第四章 『山の音』論

『山の音』は、戦争によって引き裂かれた物・心の傷跡が、まだ癒されていない傷々しい戦後の社会的状況を背景とする世界である。登場人物の中で戦争の被害を受けなかったものはほとんどいない。戦争は夫や息子、恋人をいやおうなしに奪い去る。生活も人心も荒廃し、古い道徳体系が崩壊して占領軍とともに上陸した民主主義と自由主義、個人の権利の主張の波に乗って揺れ動く。そういう戦後の価値転換の社会を背景として、『山の音』の主な舞台は、男主人公である六十二歳の尾形信吾の家庭に設定されている。その家庭もまた、社会や時代の激流に洗われて安定性を失っている。長男の修一は、結婚後わずか二年にもならないのに妻以外の女性と交渉を持っている。娘の房子は、夫との仲がしっくりせず、二人の子供を連れて出戻り同様の状態にある。このような息詰まる社会と家庭に生きる信吾には、老いへの深い自己認識による死への恐怖が押し寄せる。

ある夜、信吾は山の音を聴く。死への恐怖と回春への願望によるものである。彼は山の音を聴いたことを契機にして、息詰まるような現実を回避しようとする。それが諦念的心情による回春への願望として現われることになる。信吾は、息子の嫁である「ほっそりと色白の菊子」に少年時代から憧れ続けてきた、今は亡き美しい夭折の義〈姉〉(信吾の妻保子の姉)の面影を見、その〈姉〉の形代としての役割を負わされてきた菊子によって回春への願望を満たそうとする。つまり信吾の潜在意識(意識下の世界)は菊子を愛そうとするが、舅と嫁の間柄であってみれば、それは所詮不倫の関係に陥らざるを得ない。古い道徳律にしばられるモラリストの信吾が、そうした歪んだ愛に走るはずがない。こうなると『山の音』の世界の基本構図は成り立たなくなってしまう。そこで作



者は、主人公たち、つまり、信吾と菊子の内部に意識の二重性を機能させるこよによって、二人の間に愛の情感を無理なく流通させる。二人は、日常的意識の上では世間体に順応した仲のよい舅と嫁としての生活を自然に営み、深層の意識下では相互に愛し合うことになる。こうした意識の二重性は、信吾のみた九回の夢に現れ、数多く設定されている動植物や伝統的絵画などによって象徴される。殊に夢に関する表現は、意識下の信吾の本音を理解する上で重要であり、現実的には不可能な時間の逆行を、夢の特性である超時空性によって可能ならしめるものに外ならなかった。こうして夢は信吾の回春への願望を充足し、意識下の愛をも完成させることになったのである。

しかしながら、二人の間の意識下の愛は、永続することが許されない。信吾は〈姉〉の形代としての、まだ未熟な女としての菊子にひかれて愛したのであって、菊子が成熟した女に変貌することは、彼女が信吾から離れて夫の修一のもとに戻ることを意味するからである。そして信吾は、最終章「秋の魚」第四節において、鳩の飛ぶ羽の音を天の音として聴くのであるが、この鳩に象徴された菊子は、やがて信吾から離れて行くことになる。深層の意識下での二人の愛は、山の音を始発点に開展し、天の音を終着点に終焉する。このような二人の愛は、『雪国』における島村の言葉のごとく、全くの「徒労」に終わってしまったのである。しかしながら、「徒労」であるが故に純粋である、という島村の美意識と同様、信吾と菊子の意識下の友情には純粋で美しいものが流れ漂っていることは否定すべくもない。

『山の音』は戦争によってもたらされた荒廃した社会生活と人心とを外枠として設定し、現実回避的な信吾の諦念的心情、つまり老いと死に対する深い認識によって形成された回春への願望を、〈姉〉の形代としての菊子を媒介として成し遂げようとし、やがては別離を告知するに至る意識下の世界を彫り下げた作品である。信吾が聴いたという山の音がこの作品の基底音を成し、また意識下での信吾と菊子との官能美指向とそれへの抑止力を同時に作動させる愛のモチーフを主旋律として、この基底音と、主旋律とが微妙に交響し、調和しながら序章から終章まで一貫して響き合う世界が、『山の音』の構造に外ならなかったのである。

## 第五章『古都』論

『古都』は、京都という特定の場所空間を舞台とした作品である。したがって、『古都』は一種の「地理的（観光案内的）、風土的小説」（山本健吉）としても据えることができるだろうが、そういう伝統美の風光を背景として、ストーリーを追って登場人物たちの微妙な心理のひだを読み解くのが正当な評価につながるものであると言えよう。

ところで『古都』は、作品川端が執筆中に大量の睡眠薬を服用し、酔った状態で書き進めたものであるにもかかわらず、彼の作品の中では例外的ともいえるほどの常識的で健全な感覚が全篇を貫いている。このことは、川端が、『古都』を「魔界」において「魔界」を超える端正な純美の世界として描き上げることを意図した結果であるとも言えよう。

作品の冒頭に「もみじの古木の幹に、すみれの花が開いたのを、千重子は見つけた。」という一

節があるが、このすみれの花は、千重子と苗子の双子の姉妹の象徴である。川端は、初め「愛すべき恋物語」を構想して書き始めたいが、中途から「ふた子の娘の話になってしまった」と述べている。すみれの花も、作品の一貫性を考えると、構想的にも主題的にも「愛すべき恋物語」の部分を「ふた子の娘の話」の導入部分として据えるのが妥当である。

作品の中間部分で、たくましい顔をした頼もしいところのある真一の兄龍助が登場する。美しいけれどもどこかひ弱な真一では、千重子の愛の対象としては不十分であるので、龍助という人物が必要とされたのである。しかし、千重子は、真一、龍助のいずれとも、恋愛も結婚もしない。もしもそうになっていたとすれば、『古都』は「ふた子の娘の話」ではなく、「愛すべき恋物語」にならざるを得なかったからである。

『古都』が「ふた子の娘の話」という基本構想を持つものであることについては前述したとおりであるが、「ふた子の娘」とは、言うまでもなく千重子と苗子の姉妹のことである。その苗子が、秀男にとって千重子の形代として登場した経緯を見逃してはならない。川端文芸における形代の役割と意義については、これまでもしばしば触れたように作品解釈上、重要な意味を担っているからである。

ここでもう一つ注目しなければならないのは、作中の壺の中の鈴虫を設定したことである。この壺の中は永遠の世界を意味する末世とつながるものだからである。

『古都』は、単純な「小さく愛すべき恋物語」や「ふた子の娘の話」ではない。『古都』という大河の中を「ふた子の娘の話」という水が流れ行くのであるが、それは、人間の出生、生命、そしてその生命と来世との関係、宗教（信仰）、人間の存在意識にかかわる思念など、人生のもっとも根源的な課題への多岐にわたる問いを含みながら流れて行く水に外ならないからである。

## 結 論 川端康成の文学的世界

### 一、日本近代文学における川端の位相

川端は、自身の処女作として、『十六歳の日記』『ちよ』『招魂祭一景』の三篇を挙げている。『十六歳の日記』は、彼が数え年十六歳の時に書いた「原日記」に、二十七歳の時に書き加えた部分とから成っているが、その「原日記」には驚くべき「早成の文才」があらわれている。殊に「しびんの底には谷川の水の音」という叙述には、卓越した新感覚的表現を読みとることができる。いわゆる新感覚派の出現に先立つこと十年、川端の斬新な対象把握と表現技法の萌芽が認められる文章である。

新感覚派の文芸運動は、『文芸時代』に拠る横光利一・川端康成らによって推進されたものであるが、川端は、西洋化指向のはげしい同人たちとは別途に、伝統的な古風な人間関係の中に存在する人生の孤独や悲哀、生と死と愛と旅のモチーフなどを深く追究し、「徒勞」の美に至る無償の美

的、人生的境地を、新感覚派の表現によって切り開き、独自の道を歩んだ作家として日本近代文芸史の上に異彩を放った。

汚濁の中からも美を掬いとる川端の鋭い「末期の眼」は、戦後の荒廃した社会状況や精神風土にも熱く注がれ、失われつつある日本の伝統的美の再確認とそれへの回帰を訴えるに至る。このような精神的遍歴を背景に、川端は『雪国』を書き継ぎ、『名人』『山の音』『千羽鶴』『眠れる美女』『古都』『片腕』などの名作を発表し、幅広い国際的評価をもかちとることになるのである。ノーベル文学賞の授賞は、そういう川端の日本的抒情精神の孤高な美の表現に対して行われたものであると言っても決して過言ではあるまい。

## 二、川端的なるものの文芸的諸相と特質及び川端研究の今後の課題

川端的なるものの文芸的特質は、日本の伝統的美意識を十全に継承するとともに、西洋近代の波に洗われた知性と感性をも受け入れることによって、新たな美的世界への深化を図るところに求めることができるだろう。文芸的モチーフとして、「旅」「徒労」「向こう側」「生と死と老い」「愛」「形代」「夢」「魔界」「無」「輪廻転生」が多く用いられ、「万物一如」の人生観照・世界観照が志向すべき精神として、同時にまたそれが表現の方法や論理として強く庶幾されていたことは当然のことと言わねばなるまい。

本論文においては、川端の作風をかたどる主要な小説を対象とする作品論を重視するあまり、右に挙げたようなモチーフへの追究を欠き、更には特異な文体や表現機構の解明を果たすことができなかった。日本古典文芸からの影響の問題ともあわせて、今後の研究課題としたい。本論文は、川端文芸を全円的、総合的に据えるための確かな道標の幾つかを据えたに過ぎないからである。

(参考)

主要研究業績目録 (平成4年3月現在)

林 鍾 碩

### 1. 著 書

#### 1. NEW TECHNOLOGY JAPANESE <全4巻>

(張南瑚と共著)

時事英語社

平成2年3月

#### 2. 日本語会話

(張南瑚と共著)

時事日本語社

平成4年8月

(現在、校正中)

### 2. 編 著

#### 1. 日本の名随筆 新亞出版社 昭和62年9月

#### 3. 翻訳書 (韓国語及び注解・解説)

1. 岡崎義恵著『日本の文芸』  
 (張南瑚と共訳)  
 時事日本語社 平成3年3月
  2. 宇津木澄著『生きるってすばらしい』  
 培材書館 昭和61年11月
  3. 遠藤周作著『真昼の悪魔』  
 高麗苑 昭和62年3月
  4. 三浦綾子著『塩狩峠』  
 大韓基督教書会 平成3年8月
4. 論文
1. 川端康成『十六歳の日記』小論  
 —— 創作動機と「おみよ」の役割に見られる虚構性をめぐって ——  
 『日本の文芸論叢』(日本) 第4号 昭和60年3月
  2. 『山の音』私論  
 —— 信吾の老いと回春への願望をめぐって ——  
 『文芸研究』(日本) 第110集 昭和60年9月
  3. 森鷗外『雁』における女性「お玉」  
 —— 『人形の家』の「ノラ」にも触れて ——  
 『日本文芸論叢』(日本) 第6号 昭和63年3月  
 『日本学報』(韓国) 第21集 昭和63年11月
  5. 太宰治『ヴィヨンの妻』の世界  
 『学術論文集』(韓国) 第17集 昭和63年11月
  6. 芥川龍之介『偷盗』の世界  
 『日本文芸論叢』(日本) 第8号 平成2年8月
  7. 『雪国』の世界  
 『日本語教育』(韓国) 第1号 平成4年3月

### 論文審査結果の要旨

本論文は、川端康成の文芸活動のうち、主として小説を対象として考察を行ったものである。したがって、「第二篇 川端康成の小説の世界」に見られるごとく、作品の世界それ自体を徹底的に分析し、文芸学的解釈を試みる作品論を主眼とするものであることは言うまでもない。しかしながら川端の場合は、その文芸的出発・読書体験・人生体験・『新思潮』及び新感覚派との問題などを

中心とする文芸的・精神的基底をも無視するわけにはいかない。作品世界との間に、微妙な脈絡を有するからである。論者が、「第一篇 川端康成における文学的自覚と形成」において、そうした側面についての基礎的作業をすすめているものもそのために外ならない。

「序論 川端康成研究の課題」において、まず、上のように「川端研究の対象と方法」を設定した論者は、ついで「川端研究の現段階」を、研究史に即して過不足なく紹介し、伝記的研究に偏りがちな動向についても触れる。

「第一篇」では、川端康成の創作活動における文芸意識の開眼とその形成事情を丹念に追究し、川端の文芸的・精神的基底を複眼的な視座から明らかにする。

「第一章 川端の文学的出発—『十六歳の日記』とその周辺—」においては、川端が処女作と自認する『十六歳の日記』の素材となった「原日記」を検討し、祖父との閉塞された孤独な日常生活が、やがて彼の中に、非現実への空想・孤児根性・徒勞の精神などの人生感情を芽生えさせたこと、一方、対象を客観化する散文的精神と、それとほとんど等価の主観的抒情精神が共存していた事実などを指摘する。

「第二章 川端の読書体験」では、日本古典や外国（西洋）文芸への関心とともに、聖書の存在が川端の精神に影を落としており、そうした多面的な読書体験が、彼の人生観の形成の契機となり、文芸的モチーフとして川端文芸の基層に浸透していった経過を立証して新見を提示する。

「第三章 川端の人生体験」では、川端文芸を理解するうえで重要なキー・ワードとされる「孤児」・「同性愛」・「恋愛」などの実体験を詳細に検証し、自己浄化による自己救済という特異な文芸的モチーフと小説の方法論の水源を探り当てる。

「第四章 川端と『新思潮』」及び「第五章 川端と新感覚派」は、いずれも川端の文芸的出会いの場に射し込む友情の意義について言及したものである。特に、後者においては、「新感覚派」的表現の先駆者として川端を画定し、万物一如の思想がその方法論的基盤となっている、との見解を述べている点が注目される。

「第二篇」では、上のような川端の文芸的・精神的基底にも強く視線を注ぎながら、作風の展開過程と微妙な対応関係を示す『十六歳の日記』以下五篇の作品を対象に、その小説的構造やモチーフ・主題等について究明し、川端的なるものの文芸的諸相と特質をも浮き彫りにしている。

「第一章 『十六歳の日記』論」において、論文は、「原日記」との対比をとおして、川端の虚構化の特色に触れ、「写生風の日記」としての実録的立場からする従来の評価に対して、疑義を差し挟む。そして、特に「おみよ」の存在が、祖父の死を凝視し、死の意味を問いかける視点となっていることを強調する。いずれも新見を含む重要な指摘であることは言うまでもない。

「第二章 『伊豆の踊り子』論」では、踊り子の放った「いい人」という一言によって、主人公である「私」の精神の病患が癒され、慰撫される点に主題を求めうることを詳述する。さらに、現実の世界としての「こちら側」と、非現実の世界としての「向こう側」という場面空間の設定についても論及し、現実における挫折、非現実における治癒、回帰現実における再生の三項関係が、川

端文芸の表現機構の特徴である、とも述べている。このような主題と表現機構にかかわる論者の見解には、聴くべき点が多い。

「第三章 『雪国』論」においては、この作品の基本的構図を、島村・駒子・葉子が切り結ぶ三者関係に求めながらも、島村は生活的人格を欠落した（付与されていない）虚像であって、駒子の愛のすがたを映す鏡として機能しているに過ぎないと論定し、一方、葉子は駒子の分身として設定された人物である、とする新たな観点を示して、通行の諸説に訂正を迫る。そして、本体としての駒子と、分身としての葉子を相互に機能させることによって、肉体的・官能的愛よりは、むしろ精神的純愛の精神と行為を、すなわち「徒勞」の愛のはかない無償の純粹さを、「徒勞」の人である島村の鏡の中に映し出していく「駒子の恋物語」としての作品の構造を精細に分析する。そうした「徒勞」の愛を、非現実的・非日常的仮象の世界、虚像としての向こう側の時空間の中に、哀しく、はかなく凍結せざるをえなかったところに、川端の人生観照の深さ・確かさと哀切な美意識を読みとることができる。と主張する。上に示された論者の着眼は多くの新見を含み、論述は極めて説得力に富む。

「第四章 『山の音』論」では、巨細を尽くした論者の考察が繰り広げられる。山の音を聴く信吾は、古い・死への恐怖と回春への願望を、息子の嫁である菊子によって満たそうとする。菊子は、信吾の少年時代からの憧憬の対象であり、今は亡き美しい夭折の義姉（信吾の妻保子の姉）の形代として役割を負わされた女性だからである。作者は、信吾と菊子の内部に、日常的意識と深層の意識下の世界という、意識の二重性を機能させることによって、2人の間に愛の情感を無理なく流通させる。このような意識の二重性は、信吾のみた9回の夢に現れ、数多く設定されている動植物や伝統的絵画などによって象徴的に描写されている。こうして夢は、信吾の回春への願望を充足し、意識下の愛をも完成させるに至る。しかしながら、2人間の意識下の愛は、永続することが許されない。信吾は、義姉の形代としての、未熟な女である菊子にひかれて愛したのであって、菊子が成熟した女に変貌することは、彼女が信吾から離れて、夫の修一のもとに戻ることを意味するからである。深層の意識下での2人の愛は、山の音を始発点に開展し、天の終着点に終焉する。上のように、『山の音』は、戦争によってもたらされた荒廃した社会生活と人心とを外枠として設定し、現実回避的な信吾の、老いと死に対する深い認識によって形成された回春への願望を、義姉の形代としての菊子を媒介にして成し遂げようとし、やがては別離を告知するに至る意識下の世界を掘り下げた作品であることを、論者は、詳細に論述している。従来の研究史を大きく超える、数多くの創見が光彩を放つ論旨であることは言うまでもない。

「第五章 『古都』論」においては、「愛すべき恋物語」から「ふた子の娘の話」へと変貌する構想上の推移を丹念に辿り、人間の出生、生命、そしてその生命と来世との関係、信仰や人間存在にかかわる根本的思念など、人生の最も根源的な課題への多岐にわたる問いを、「魔界」について「魔界」を超える端正な純美の世界として描き上げることが意図した作品である旨を立証する。「壺の中の鈴虫」の解釈などに新見が認められはするものの、通説をなぞるにとどまる箇所も見受けら

れ、今後に新たな視点の設定が望まれる。

「結論 川端康成の文学的世界」では、川端における「新感覚派」的表現の萌芽を、『十六歳の日記』の先立つ「原日記」に求め、伝統的な古風な人間関係の中に存在する人生の孤独や悲哀、生と死と再生、愛と旅のモチーフなどを深く追及し、「徒勞」の美に至る無償の美的・人生的境地を、一貫して「新感覚派」的表現によって切り開いた作家として、川端を日本近代文芸史のうえに措定する。川端的なるものの文芸的諸相と特質も、上のごとき構図の中に読みとることができる、とも指摘する。

以上のように、本論文は、川端康成の文芸的世界の全体像を、創作意識の開眼とその形成事情をも視野に入れながら、作風の展開過程に刻印する五篇の小説作品を対象に、その文芸的構造やモチーフ・主題等を究明することによって照射しようとするものである。広く従来の研究史を踏まえ、通行の諸説に疑義を呈しつつ、新たな視点によって自説を補強し、作品解釈に自らの創見を慎重に導入して、その体系化を企図した精到な論述であることは言うまでもない。川端の伝記的事実と小説の世界を短絡し、そこに作品解釈の根拠を据えるこれまでの動向をきびしく退けたうえで、本文異同にかかわる文献的操作をも積極的に援用する独自の作品解釈学の方法論を編み出している点も見落としがたいところである。

本論文においては、川端文芸の作風をかたどる主要な小説を対象とする作品論を重視するあまり、川端文芸の原風景ともいべき掌の小説に言及することなく、また、「魔界」・「万物一如」・「輪廻転生」・「聖書」などの文芸的モチーフへの追究を欠き、さらには、特異な文体や表現機構の解明へと歩みをすすめることもなかった。日本古典文芸からの影響の問題ともあわせて、今後の考察に期待したい点も少なくはないが、このことは、本論文の評価にかかわるほどのものではない。

総じて、本論文は、先行の研究業績を批判的に踏まえ、しかも独創的な着想と綿密・周到な論証によって、川端康成の研究に未踏の分野を切り開き、斬学の水準を高めたものであることは、疑いを入れないところである。

以上の理由によって、本論文の提出者は、博士過程を修了し、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。